大阪日日新聞

文化 Culture

関西の音と人

大阪大学大学院 文学研究科
音楽学研究室
薗田 郁

映画「琵琶法師　山鹿良之」

身近な芸能者、盲僧に迫る

「見掛けで人気は取れん！『芸の力を出せ!!』。ザラ付きのある声がスクリーンを通して響き渡る。声の主は山鹿良之さん。映画『琵琶法師 山鹿良之』（1992年製作、青池憲司監督）の一幕だ。この映画は九州熊本の南関町を住処に、地域の檀家を廻りながら語りを生業にした盲僧、山鹿良之さんの姿を記録している。撮影されたのは昭和の終わり頃だから既に30年以上が過ぎている。山鹿さんの語りと共に、晩年の生活の様子が主に収められている。

盲僧（盲人の僧侶）のいる。盲僧芸の系譜は実に長く、そして枝分かれしている。起源は伝説的要素も多く含むが、平安期頃まで遡ることができ、そのうちの一つは大陸から九州一円まで伝わった。九州では江戸末期から昭和半ばまで盲僧の芸が拡がり、山鹿さんの系譜である肥後（現在の熊本県）琵琶の他にも、薩摩（同鹿児島県）琵琶、筑前（同福岡県西部）琵琶と呼ばれる盲僧が活動していた。山鹿さんはそうした芸能者として生き抜いた最後の盲僧と言ってよい。盲僧は周辺地域の檀家を廻りながら「竈払い」などの法要を執り行うが、その後の娯楽的余興として語りが披露される。映画の冒頭語りといえば、平家物語を琵琶を手に語っていた琵琶法師がよく知られている。

映画『琵琶法師　山鹿良之』の一場面

語りから始まるが、そこから彼が単なる僧侶ではなく、芸能者でもあることがよく判る。

映画は山鹿さんの日常生活を映し出し、その半生を振り返りつつ、『小栗判官』の語りがその合間を縫う形で進む。『小栗判官』は、常陸国（同茨城県）に流れ着いた小栗が、武蔵（同埼玉県西部と東京都多摩地区周辺）の郡代横山大膳の娘である照手姫を強引に娶ったため、父大膳の怒りを買い、毒殺され地獄に落ちて餓鬼阿弥の姿となるものの、姫の助けもあって熊野の湯治により元の姿を取り戻して大膳を討つという、いわばどん底からの壮絶な蘇りの物語だ。

5人の子供を次々と亡くした山鹿さんの壮絶な半生が小栗判官の物語とも重なり、観客は彼の語りにどんどん引き込まれていく。しかし印象に残ったのはそれだけではない。たとえば、何げない会話から出た口三味線（三味線の音を口で真似ること）付きの唄を歌う楽しげな姿や、法要で訪れた地域の人と普話に花を咲かせる和やかな姿。これらもまたこの地域で芸人として生き抜いてきた山鹿さんに欠かせないものであることが強く感じられた。

映画は歴史の彼方にいた琵琶法師ではなく、ほんの少し前まで生きていた身近な芸能者の貴重な証を見せてくれる。とはいえ、生誕120年を記念して特別上映された令和の現在から見れば、平成まで生きた山鹿さんさえも遠い存在となりつつある。それでも山鹿さんの声は確実に我々の奥深くまで届いていた。芸能とは連続性や断絶あるいは更新されながら、それらを全ての飲み込み引き継がれていく。そのことを映画の中の山鹿さんが改めて教えてくれた。

映画は今後、全国ミニシアターなどで上映会を予定している。詳しくは題名でネット検索して確認の上、配給元の「KENT－OFFICE」長嶋建人さんまでメールなどで問い合わせを。

（特任研究員）